

中心市街地の活性化・カミン対策の強化について

中心市街地の活性化に対する市民の関心は大変大きなものがあります。とりわけ、ショッピングプラザ・カミンでショッピングセンター運営事業を展開してきた上山二日町ショッピングセンター協同組合の自己破産に対して市民は大きなショックを受けています。買い物客、商店の従業員、地域住民が泣きながら助けを求めています。私は何よりも行政が責任を持ってこの問題に対処し、買い物に困っている市民の声に耳を傾け、そしてショッピングセンターの経営者・従業員に展望を与えられるような施策の構築が求められていると思います。

ショッピングセンター協同組合は1993年に設立され、約9億5,600万円を借り入れて1階・2階の商業スペースを取得し、運営されてきましたが、20年間で返済したのは1億円程度で、負債総額が8億9,000万円にも上っています。この間、市としても空きスペースへの新たな出店の推進や広場を利用したイベント・発表会の企画、高齢者サロン事業の展開など、にぎわいづくりにつとめてきた経過がありますが、残念ながら自己破産という結果になってしまいました。

今後、破産管財人のもとで破産者の財産の換価処分が行われ、債権者（そのほとんどは県）に弁済が行われますが、財産状況報告集会等が9月8日と伺っています。破産処理についてはその推移を見守る必要がありますが、一方で本市としての対応策を今から十分に検討していく必要があります。以下、カミン再生に向けた問題提起を行いたいと思います。

まず、カミン再生の事業を誰が責任をもって行い、事業推進の担い手をどうつくるのかという問題です。この問題で、まだ破産前ではありましたが、民間シンクタンクが報告書を作成し、カミンを「地方創生に向けた拠点」としての役割を担う「公共・公益的な施設」として運営するため、市の参画を強化する、と明記しています。また、施設再整備にあたっては、上山二日町再開発株式会社が組合所有部分について固定資産評価額等に基づき買い取ることも含めて検討する必要があると明記しています。さらに組合店舗をはじめ、新たな機能展開に向けた担い手確保と育成を行い、そのために中心市街地内の市民・事業者・各種団体を巻き込んだ検討を進めるとしています。

いま中心市街地活性化の次期基本計画の策定に向けた準備が進められていると伺っていますが、その中でカミンの問題をどう位置づけるのか、カミンも中心市街地活性化の主要課題となるのかどうか、明らかにする必要があります。

私は、市が積極的にカミン再生にとりくみ、そして、中心市街地活性化の中心課題としてカミンを位置づけ、店舗の方々や地域住民の要望に応えていく必要があると考えています。そして、カミンが中心が活性化の核として大きな役割を果たし、より人々が集まりやすい場としていくために、以下のような具体的な提案を行うものです。

(1) 高齢者の介護・福祉事業を進める宅老所の設置

いま市民が一番行政に求めていることは、健康で長生きできる施策の構築です。上山市の象徴ともいえるカミンで高齢者の介護・福祉事業を進めていくことは、多くの市民が望むものではないでしょうか。さらに、少子高齢化が進行し、人口減少が急ピッチで進む本市において、健康・福祉を前面に出したまちづくりを進める必要があります。安心して子どもを産み、育てられるまち、安心して医療や介護が受けられ、子どもからお年寄りまで一番暮らしやすいまちとしてアピールしていく必要があるのではないのでしょうか。

また、高齢者の利用割合が高い現状から見て、高齢者の集客をいっそう広げる上でも、高齢者を対象にした事業を拡大していく必要性があるのではないのでしょうか。

そうした健康・福祉のまちづくりの一環としてカミンが大きな役割を担うために、カミンの内部に宅老所を設置することをまず提案します。宅老所とは、介護保険サービスなどの既存制度の範囲では手が届かない部分にもきめ細かく対応した独自の福祉サービスを提供する地域に密着した施設です。元気なお年寄りから要介護度の高い方も対象に、マンツーマンに近い形で高齢者に寄り添ったサービスを提供するのが特徴で、特に認知症ケアの面で優れた効果をあげています。宅老所の多くは、独自のサービスとあわせて、介護保険法にもとづく指定を受け、居宅介護サービスを提供しているところもあります。住み慣れた地域で、家庭的な雰囲気の中でサービスが提供され、運営スタッフも地元のボランティアの方々が参加されることも多く、まさに「地域によって高齢者等を支えているところ」といえるものです。

ユマニチュードという認知症ケアについては、以前NHKクローズアップ現代でも取り上げられ、ご存じの方も多いと思います。それは目の高さを同じにしてまっすぐに見つめ、優しく話しかけ、スキンシップをはかり、自立を援助するというきわめてシンプルな、まるで赤ちゃんに対する母親の対応そのものですが、ユマニチュードの導入で、薬の使用を減らしたり、職員の負担が減った、職員に対して声を荒げていた人が感謝の言葉を口にするようになったなど、すぐれた効果が報告されています。

このユマニチュードこそが、実はフランスから導入される以前からすでに日本の宅老所で実践が積み上げられてきた、すぐれた認知症ケアの方法なのです。私も県内の宅老

所と関わりを持った経験があるのですが、常に寄り添い、これまで過ごしてきたのと同じような環境で家庭的なサービスが行われることによって、認知症の高齢者が劇的に改善した事例も目の当たりにしました。高齢者が笑顔を取り戻したり、おむつが取れたり、心が安定し穏やかな老後を過ごす上で非常に有効な施設であることを実感しました。

今後、宅老所はグループホームとならんで21世紀の高齢者福祉の切り札になるともいわれています。NPO法人でボランティアの参加が積極的にはかられる形態は今後国も強く推奨するものですが、上山市での典型をつくりあげるため、市としても積極的に支援していく必要がある分野であると考えます。

また、カミンのスーパーがあったところに、有志の方が懐かしい映画のポスターを多数展示してくれています。たとえばこの空間を昭和のまちとしてよみがえらせて高齢者の懐かしい思い出があふれる空間をつくることによって、高齢者の憩いの場、心の安定を養う場としていくことも重要ではないかと思います。

(2) 屋内で子どもが遊べる施設の設置

冬季間や夏の暑い時期、雨天の時などに自由に子どもが遊べる場がほしいというのは長年の保護者・子どもたちの願いです。今回のカミン再生の機会を絶好の機会として捉え、こうした子どもたちの遊べる環境を整えることは、これまで市で実施してきた子どもの医療費無料化や第三子保育料無料化とあいまって、少子化対策のさらなる前進につながるのではないのでしょうか。子どもからお年寄りまで安心して暮らせるまちづくりの中心施策としてカミンの内部に子どもが遊べる屋内施設の設置を提案します。

このほかにも観光客用のおみやげや特産品を扱うコーナーの設置や、鶴岡市中心市街地活性化の一環として取り組まれ、織物工場跡地を利用して新作のほかに名画の上映も行われる「鶴岡まちなかキネマ」のような映画館構想なども必要だと考えます。